＃10「子育てサロン かりんの木」（長野県塩尻市）

1．概要

運営主体	個人		
所在地 （基礎自治体）	長野県塩尻市	人口規模* （基礎自治体）	66,710 人(R3.4 現在)
（活動範囲）	塩尻市（贄川地域）	（活動範囲）	602 人(R3.4 現在)
活動拠点の種類	古旅館を改修したシェアハウス		
活動開始年	2021（R3）年		
活動概要	・子育てに不安や孤独感を抱えている親御さんの拠り所になることを目的とした３歳児未満の子どもとその親が集まる子育てサロン。 ・子どもが遊んでいる間、親同士で集まってお茶をしたり、話し合ったりと 2 時間ほど活動をする。		
対応する地域課題	地域におけるつながりの希薄化/世帯が抱える課題の複雑化・複合化/生活支援ニーズの増加/就労や社会参加の機会がない（乏しい）こと		

*人口出典：塩尻市 WEB サイト「人口・世帯数」 https://www.city.shiojiri.lg.jp/soshiki/7/2364.html

2．活動の展開プロセス

■地域の状況

・贄川地域は古くからの地域であり、高齢化率も高く、子どもも少ない。
・地域の中に保育園も一つしかなく、街中に親子がいるイメージがない。

■活動者の思い、バックグラウンド

・保育士時代の経験から、小さな子供がいるお母さんが子育てに悩む姿や孤独感を感じている姿に問題を感じた。
・不安や孤独感を抱えていても、話せる相手がいればその困難を乗り越えていけるのではないかと考え、もっと気軽にコミュニケーションが取れる場所、拠り所のような場所があればと考えるようになった。
・保育士をやめるにあたり、保育士としてではなくなにか自分にできることはないかという気持ちであった。
・当時活動者はシェアハウスに住んでいた。
・シェアハウスのコンセプトは「私のままで生きていく」。

・住人には個人事業主も多く、シェアハウスは若い世代と地域をつなげるいわば実験的な場所でもあった。
・そこで暮らし始め、自分の思いをシェアハウスのオーナーや住人と共有していく中で、出来ることがあればこの場所を使っていい、と言ってもらえたことが取組を始めるきっかけである。

活動者の思いの実現 POINT

何かを始めたい人と地域をつなげる拠点になることが
シェアハウスのコンセプトである。
シェアハウスの住人達との会話の中で、活動者の「やりたいこと」の具体化がなされている。
やりたいことに対して「WHY」と「HOW」に分けて考え、
自分の中の教育や保育への興味、子育て世代への一つのアプローチとして
子育てサロンに取り組むこととなった。

■社協への相談

・子育てサロンを始めたいがどうしたらいいかわからないと社協に相談している。
・社協には活動立上当初から関与してもらい、アドバイスをもらっている。
・相談を受けた社協の部署は子育てに限らず、地域課題解決に向けて立ち上がった活動の支援に注力している。
・まずはどこで活動するか、そもそも地域に活動のニーズがあるか、どのように活動を形作るか考えるために情報集めから支援が始まっている。

社会福祉協議会による支援の取組 POINT

社協の支援として、社協主催の講座を利用した地域への周知がある。
かりんの木の周知が地域でなされていなかったため、毎年開催されている
福祉サポーター養成講座において、子どもがテーマのときに活動者をゲストとして呼び、
サロンの紹介や立ち上げに向けた思いをビデオに収めたものを上映した。
地域の担い手となる地域の方への理解や賛同を得ることも目的としている。

■場所探し－2 つの拠点の候補－

・活動拠点の候補として、住んでいるシェアハウスのスペースの他に、市街地にある商店街の空き家をリノベーションして地域の方にシェアスペースとして開放している拠点があった。
・それぞれの候補の拠点には社協と一緒に見学に行っている。
・活動者の思いとして贄川地域で子育ての悩みを抱えている母や子供たちと、そこに住んでいる地域の方とのつながりを作りたいという思いがあったため、贄川地域にあるシェアハウスを拠点とすることに決定。

■メンバー集め－社協による地域とのつながりづくり－

・基本的には月に 1 回の開催ということもあり、活動者 1 人での取組である。
・参加者は子育てに関する施設に活動のパンフレットやチラシを置かせてもらっており、それを見て参加してくれている。
・社協により、取組を長く続けるには地元の方との関わりが不可欠ということで、民生委員など地域のキーパーソンへの声かけがなされ、つながりづくりのきっかけが作られている。

・地域と子育てサロンをつなげるにあたり、区長や民生委員からの意見をもらい、子育てサロンの開催中に自由に見に来てもらえるようになった。
・当日は看板を出しているので、それを見て子どもが多いときは一緒に見てくれたり、おやつを持ってきてくれたりと、手伝いに来てくれる方もいる。

POINT

活動をきっかけとした新たな地域とのつながり

活動を始めるにあたり、贄川地域が古くからの地域であり、
新しく来た若い世代に対して抵抗のある方もいるのではないかという懸念があった。
また、区長や民生委員からは
「エネルギーは感じるが、一緒に何かをやろうというきっかけがない」
という話も聞かれた。
子育てサロンをシェアハウスで行うことを社協が周知することにより、
拠点の見学に来てくれたり、手伝いに来てくれるなど、
新たに地域とつながる一つのきっかけになっている。

■物品の確保－社協による活動の周知－

・社協が回覧を回してくれており、活動が周知されている。
・回覧を出すと地域の方からおもちゃや絵本の寄贈が社協になされている。
・活動者本人の手持ちのおもちゃだけだと子ども 10 人が遊びに来たとき行きわたらないため、活動にとって寄贈のおもちゃや絵本は大変貴重である。

■活動資金作り－社協からの助成－

・子育てサロンは利益性を求めていない。
・社協から年額 2 万円の補助を受けており、加えて参加費でサロンのお茶菓子や子どものおもちゃを充実させるなどに利用している。

POINT

活動者の生活と活動のバランス

活動者が現役で仕事をしている中、活動自体が収益性を求めておらず、
むしろ赤字になってしまうと継続することが不可能になってしまう。
活動者自身の生活を成り立たせないといけないため、
利益を求めない活動と生活のバランスについては課題となっている。

■新たな世代を超えた交流－シェアハウスの場所を利用した餅つき大会－

・シェアハウスで毎年年末にやっている餅つきに、地域のご近所の方と一緒に子育てサロンとしても声をかけてもらい、高齢者や子どもまで様々な年代の方と餅つきをした。
・聞いただけの体験ではなく、実際にやってみる、原始的な体験が子どもには大事であると考えている。
・子育てサロンの中で食事や食育もできればと思うが、コロナ禍もあり、できていない。

3. 今後に向けて

（１）今後の展望

■活動の形

- 月 1 回では本当の意味で何かあったときに話せるような居場所にはならないだろう。本当に寄り添いたいのであれば今のままの形では難しいといった状況である。
- 続けられる間は続けるが、今後拠点を変えたり、対象が変わったり、利益性を生む形での関与になることも考えられる。
- このままの形ではないかもしれないが、子育て世代が今後も孤独感を持たずに子育てができるよう、子どもたちが変化の激しい未来を生きていくにはどういう力をつけていったら良いか、というところに関与したい。

■仲間集め

- 協力者はいても一緒に核となって活動を行ってくれる仲間をどのように集めるか。
- 社協としては人探し、周知の場を作ることはできるが、活動者の思いと合致する人を探すことは難しい。
- 活動者になるべくたくさんの人と出会い、ゆるやかに関わりを持ってもらえるよう仲間探しは継続している。

（２）自治体・社協・包括等に期待すること

■情報発信

- 子育て世代に必要な情報がまだまだ周知されていない。
- いざというときに頼れる団体の情報で、民間の取組については発信できないため、仕方ないことかとは思うが、子育てで悩む人にとっては必要だと思う。
- コロナ禍でもあり、さらに子育て世代の孤立感は高まっていると思うので、必要な制度やセーフティネットについての情報発信に注力してほしい。

活動団体の情報	かりんの木 【連絡先】塩尻市社会福祉協議会　地域福祉推進センター TEL　0263-52-2795 WEB サイト　http://www.shiojirishakyo.or.jp/